2021 年 第三十三届韩素音国际翻译大赛 日译汉竞赛

题目：卒業の句（毕业・记）

摘要：通过对《岁时记》中有关“毕业”的佳句进行解读，融时代变迁、人生感悟、俳句鉴赏为一体。

「卒業について」という題を与えられて、何かの参考になるかと思って歳時記を開いてみたところ、面白くてついつい読みふけってしまった。わたしは最近俳句に興味を失った状態なのだが、こうやって久しぶりに歳時記を開くと心躍るものがある。やはり根は好きということか。

自分の卒業あれこれについて書くつもりだったが、急遽予定を変更して、歳時記の卒業の句について、語ってみる。

一を知つて二を知らぬなり卒業す　　虚子

劈頭の句がこれ。

虚子らしいとぼけっぷりがいい。ちょっと投げやり風だが、背後の怪人虚子の炯々たる眼光が見えている。どういうシチュエーションで詠まれたのだろう。「君たち卒業したからと言って、まだまだ青二才なのだ。気をひきしめてかからんといかんよ」と忠告しているようでもあり、単に嫌みを言っているようでもある。餞というより、卒業子を眺めての素朴な感想という読みもあるかもしれない。

卒業子頤にひげもち恩を謝す　　青邨

山口青邨はわたしの師匠筋にあたる。青邨の句会には学生時代、何度か出たことがある。この句は卒業のシーズンになるとよく人の口の端にのぼった。

現代では珍しいこともなんともないが、当時、官学の東大で、卒業生がヒゲを生やしてるなんて、それですでにバンカラ風とみなされた。古き良き時代なのだ。そう言えばわたしの同級生にも卒業時にヒゲを生やしたやつがいた。今なら内定取消が怖くてできないか。

卒業の兄と来てゐる堤かな　　不器男

不器男らしい抒情的な句。卒業するのが自分でなくて兄だというところがミソ。そうすることで、より卒業のさみしさ、やるせなさを表している。

不器男の句というのは、どれにもちょっと不吉な影がある。この句にしても、その後の兄の運命がちょっと気になる。「来てゐる」というたんたんたる叙法が、かえってさびしさを深めているのだ。

校塔に鳩多き日や卒業す　　草田男

卒業シーズンになると必ず思い出す一句。草田男は、常に渾身の句を詠む作家だった。俳句をよく読んでいた時代は、さほど思い入れのある作家ではなかった。その渾身ぶりが暑苦しかったのだ。が、現在のように脱力俳句ばかりの

時代になると、ああ、こういう人がいたから昭和俳句は繁栄したんだな、としみじみ思ったりする。

こういう一見無技法の句は誰でも詠めるような気がするのだが、そうはいかない。

人は卒業する時必ず校塔を仰ぐ。この機微がわからないと、すでに詠めない。そうして、そこに象徴的な意味を探ろうとする。草田男は鳩の多さに気づいた。

草田男の学生時代は決して楽しいものではなかった。むしろ苦難の日々だった。にもかかわらず、いざ卒業となって校塔を仰いだ時、学校はほとんど聖化されてみえた。鳩はその聖性の象徴である。ここに「卒業」という言葉の重みがある。

名句といっていい。

或るクラスもっとも泣きて卒業す　　兎庸

未知の作者なのだが、たぶん学校の先生だったのではなかろうか。確かに人に個性があるがごとく、クラスにも個性がある。わたしは塾でしか教えたことはないが、それでも時々「このクラスだけは手放したくないな」と思わせるようなクラスがあった。おそらくこのクラスは、感激屋がいっぱい揃っていたのだろう。兎庸氏もこのクラスに好感を抱いていたのではないか。そのクラスがみんな顔をくしゃくしゃにして泣きながら卒業していった。学校に残る教師は、こういうときいちばんさみしい思いをする。しかし同時にあるほっとした気分も味わい、また新しい生徒を迎える勇気がわいてくるのだ。

（节选自日本作家小林恭二的随笔『卒業の句』，1432 字）